BUNGEI OG NETWORK TSUSHIN

文芸OGネットワーク通信

vol.30

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1 共立女子大学文芸メディア研究室内 文芸OGネットワーク
Tel & Fax 03-3237-2681 URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei
代表 多田 久恵 発行：2019.3.30

第15回文芸サロン講座 開催

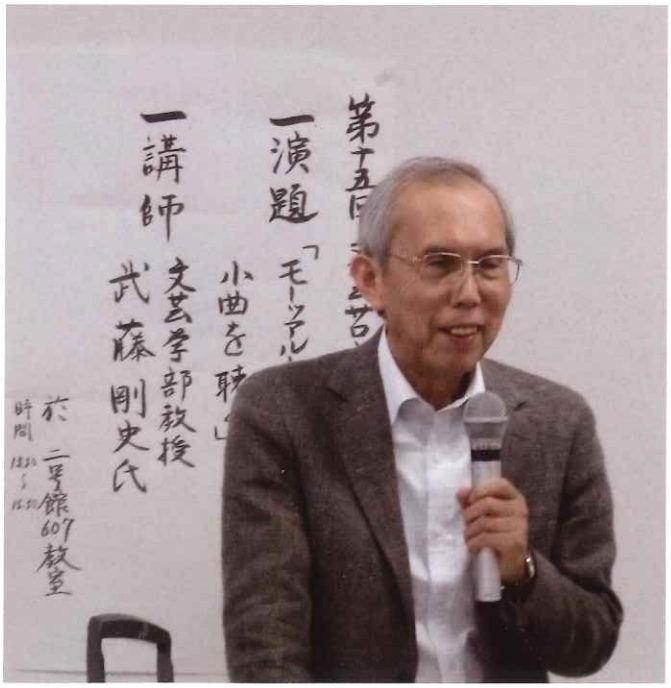
第15回文芸サロン講座は2018年10月20日の総会のあとに行われ、「モーツァルト最晩年(1791) の小曲を聴く」と題し、文芸学部教授武藤剛史先生にご講演いただきました。

実際に小曲の一部を聴きながらお話をうかがうことができました。当日配布された武藤先生の資料(要旨) をもとに、講演の概要とその所感を柴田貴代美さん(S59卒) に書いていただきました。

モーツァルトは、生涯で六百数十曲を作曲しましたが、1790年は5曲しか作曲していません。その理由は、インスピレーションの枯渇（ジャン＝ヴィクトール・オカール）にあったのではないかと言われています。「打ち砕かれた自我、魂の死」があったということだそうですが、彼がフリーメーソン（会員同士の親睦を目的とした友愛団体であり、秘密結社）を信奉していたため、新たに即位した皇帝から疎んじられたことも理由の一つと考えられています。

父親に宛てた手紙に「常に死がある」と書いていて、そこに悲しみが感じられ、「死」と「生」は切り離せないもので、「死」の中に自分の存在の底を感じていたのではないかということです。

けれども、最晩年(1791年)は30曲近く作曲しています。



自分の魂の真の根底を意識するにいたり、魂の再生、新たな命の蘇り、それが最晩年の創造力復活の秘密だろうと武藤先生は述べられました。

そして、晩年は聴衆を喜ばせることや、聴衆の称賛を得ることではなく、モーツァルトは思い煩いから解放され、自分の内的宇宙から響いてくる音楽に聴き入ろうとし、自分の音楽が生まれる源泉の在処をはっきり突き止めたのだと述べられていました。

『グラス・ハーモニカのためのアダージョとロンド ハ短調K.617』は、モーツァルト自身の魂のもっとも深いところから生まれているようで、モーツァルト的情調のエッセンスそのもの（マッサン夫妻）という指摘があります。また、この小曲ひとつに最晩年のカタルシス（魂の浄化）がすっかり表現されている（コルマン＆オルテガ）ということです。

武藤先生は、学生時代に住んでいらした京都で、仏文学と共にモーツァルトに夢中になられたそうです。私達学生に、そんな話をされたことがなかったので、全く知りませんでした。

私は1989年に文芸学部に入学し、1、2年生は、出来たばかりの八王子校舎に通っていました。2年生から仏文学コースに決まりましたが、1年生からフランス語を選択していたので、若かった武藤先生の授業を受けていました。仏文学専攻の学生は二十数名しかおらず、科目によっては数名という時もありました。先生は時々はにかんだ笑顔で、優しく私達を見守って下さっていました。

その武藤先生は、この3月で退職されます。大学には私達の知っている先生が、いらっしゃらなくなります。とても寂しい気持ちです。

文芸OGネットワーク総会

2018年度文芸OGネットワーク総会は、10月20日に2号館の607号教室で開催された。今回は、役員会での話し合いの結果、共立祭と同じ日に行うこととなった。川瀬治子氏の司会で総会は11時に始まった。会場には、演劇のポスターの一部が展示された。

代表の多田久惠氏の挨拶のあと、会報、劇芸術資料整理、文芸サロン講座、共立祭、ホームページの各担当者より2017年度の活動報告と2018年度の活動予定の説明があった。またホームカミングデイの報告も加えられた。会計からは、2017年度の収支決算の報告があり、会計監査からも相違ないとの報告があった。また2018年度の予算が提示されて会員の承認が得られた。最後に多田久惠氏から2019年度の活動についての話があった。昼食、懇談をはさみ午後1時半より文芸サロン講座が行われた。総会の出席は29名、サロン講座は35名であった。

劇芸術資料室から　共立講堂と本館ホール展示

1938（S13）年に落成した共立講堂は、戦前戦後を通じて音楽会会場として有名であった。音楽だけではない。俳優座は「オセロウ」(1952)や「十二夜」(1961)を、文学座は「結婚の申し込み」(1946、47)「驟雨」(1960)を上演している。共立講堂は長らく芸術文化の発信の場であったのだ。

昨年9月から11月にかけて本館ホールでは総合文化研究所主催・文芸ＯＧネットワーク協力のもとに「宝塚展」と「文学座展」が開催された。多数のポスター、貴重な古い演劇資料の展示とともに「宝塚歌劇の現在展」では歌劇研究の第一人者である立教大学特任教授川崎賢子氏の講演と、元宝塚雪組トップスター水夏希氏を迎えての対談が催された。川崎先生は100年の歴史をふまえながら最近の宝塚演劇活動を具体的に紹介され、改めて宝塚の魅力と底力を示されていた。水夏希氏は退団後の活躍も目覚ましく、その潑剌とした前向きの姿勢は宝塚で培われたものでもあろうが、聴衆を十分魅了するものであった。

「戦後新劇と文学座展」では演劇評論家大笹吉雄氏による講演と「女の一生」の布引けい役の俳優山本郁子氏を迎えての対談が行われた。「文学座の80年と今」と題された講演で大笹氏は、文学座が時代とともに、またある時は時代を先取りする形で新劇運動を牽引してきた80年の歩みを、明晰な口調で語っておられた。今や文学座を代表する俳優の一人である山本郁子氏は和服姿も美しく、研究生時代から入団以後の活動、また故杉村春子や故太地喜和子とのふれあいを懐かしく語っておられた。ファンとおぼしき男性のお一人は「共立に演劇コースがあるとは知りませんでした」と語りながら、展示資料を熱心に覗いておられた。おりしも神保町は「神田古本まつり」の真っ最中。本館ホールが、かつての共立講堂と同じく、文化と芸術を発信する空間であってほしいと望むものである。

多田久惠（S45院卒）

女性の自立と社会的地位向上をめざす建学精神のもと、創立133周年を迎えた共立女子学園。学び舎を巣立ったあと、仕事や家庭、地域など社会の様々なシーンで共立Spiritを放っているOGを紹介していきます。

file6 森口 歩

Ayumi Moriguchi

図書館と聞いて、まず思い浮かぶのは「本を借りる場所」ですよね。今回のゲスト森口歩さんが勤務されている東京都立図書館は、本の貸し出しはなく、閲覧と資料展示がメインの図書館です。2014年、文芸メディアコースを卒業後、図書館司書として都立図書館に就職。現在は、調べもの相談（レファレンス・サービス）を担当されています。その仕事内容、やりがいなどを伺ってみました。

――図書館のレファレンス・サービスとは、具体的にどのようなことをされているのですか？

皆さんの「知りたい」をサポートする部署というのが、わかりやすいでしょうか。「何かを知りたい」、「知りたいことがあるけど調べ方がわからない」という時に図書館の莫大な情報の中から、調べたい事柄や探している資料を探すお手伝いですね。司書がナビゲートするサービスです。直接来館された場合は相談カウンターでご質問をお受けします。お電話やメールやお手紙でもご利用いただけます。

――これまで森口さんが対応された質問のなかで特に印象的なものはありましたか。

オリンピック開催地の学校がそれぞれ応援する国・地域を決めて、文化交流する「一校一国運動」という活動があります。2020年の東京オリンピックに向けて、各地の学校で、オリンピックに参加する国の食事を給食で出すという取り組みをされていて。給食の献立を考える栄養士さんから、「中東などのマイナーな国の料理やレシピ」が書かれている資料、書籍を探しています。という質問を受けたのは印象的でした。

――世の中の動きにリンクした興味深い質問ですね。ところで、質問は何を聞いてもいいのですか？

はい、日々様々なジャンルの質問が寄せられます。「自分の人生のルーツを辿りたい」ということで相談カウンターに来られた方もいました。この時は、明治時代の地図を見ながら、その方のお祖父様が住んでいたエリアから同じ苗字を探して辿っていきました。

――お話を聞いていると、かつての司書という仕事のイメージが変わりました。部署にもよると思いますが、直接、人と関わる機会が多いのですね。

そうですね、毎日どんな質問がくるのだろうというワクワク感があって、新鮮な気持ちで臨めるので、私にはとても向いていると感じています。もともと就職活動では、民間企業の営業職を目指していたこともありまして、初めて会った人と話をすることに興味を持っていました。

――では、今のお仕事はぴったりですね。この仕事をなさっていて、学生時代に学んでおいて良かった！とか、役に立っていることはありますか。

図書館学はもちろんですが、一般教養で学んだことも大きかったです。質問は様々なジャンルに及びますので、社会学や経済学なども取っておいてよかったなと。幅広く、いろんなことを知っておくのが大切ですので、大学ではその素地を作っていただいたと感じています。また、藤田教授の「学校図書館メディアの構成」では、今では目にすることが少なくなったビデオテープやレーザーディスクなど、あらゆる種類のメディアを見せてもらい、名前を知らなければ検索して使い方を調べることもできないのだと教えていただいたことも貴重な経験でした。

――学生時代の素地を基に、学びは続きますね。今後の目標について聞かせてください。

昨年退職された大先輩で「歩く辞書」と言われていた方です。退職される時に「最高の司書とは？」とお聞きしたら、「どんな質問をされても、その答えが載っている本を思い浮かべられるのが最高の司書だよ」と言われました。そこを目指していきたいと思っています。ご一緒したのは、1年だけでしたが、スゴイと思うことは山ほどありました。ある小説の1節からタイトルを調べるには、どんな辞典を見たらよいかなど、データベースのソースがわかるのは真のプロフェッショナルです。検索エンジンでも教えてくれませんから（笑）。少しずつでも大先輩に近づいていきたい、というのが今の目標です。

――では最後に、将来やってみたいこと、ビジョンを教えていただけますか？

都立図書館は、一昨年、カザフスタンの図書館と資料交流をしたのですが、今後は、こうした世界の図書館と活発に国際交流をしていけたらと思っています。

――本日は、興味深いお話をありがとうございました。図書館の利用法が広がりそうです。

聞き手　高橋京子（H元年卒）

Kyoritsu Spirit!

連載 私の学生時代 ―文芸学部で学んだ日々⑯―

my school days

今回は、第18期生の稲見和子さんに書いていただきました。

共立に入学したのは1970年。担任は朱牟田房子先生。

2年次から英文に進むつもりだったので、1年次に朱牟田先生の英米演習の授業で“Letters From England”を読み、英国の様子やエピソードなどご自身の体験を聞かせていただくのが楽しみだった。

真面目な学生ではなかったが、クラスでは指名された人が数行ずつ読んで訳すことになっていたので予習はしていた。でもテストで今読んでいる本の著者名を問われ、チャペックのスペルがわからずChapecと書いてしまった程度のレベル。正しくはČAPEK。その頃は将来英国で暮らす機会に恵まれるとは考えもしなかったが、息子たちが小学生の頃、夫の転勤で数年間のロンドン暮らしを経験することになった。学生時代の教科書や参考書、辞書などはほとんど処分してしまっていたが、捨てられずに残しておいた一冊の本がある。それがKAREL ČAPEKの“Letters From England”。テキストだけでなくノートまで残っていて中にはすっかり茶色に変色したわら半紙の答案用紙まで挟んである。英国で先生が我が家をたずねてくださったとき、件のテキストをお見せしたときの先生の満面の笑みと驚きの表情が忘れられない。偶然にも最近、『チャペック兄弟と子どもの世界』展の開催を知り、渋谷の松濤美術館で兄ヨセフと弟カレルの世界に触れることができた。

先生を入居先の素敵なホームにお訪ねしたのは4年前の5月。久しぶりにその後のご様子を伺おうとホームに電話で問い合わせたところ、昨年2月はじめにご逝去なさったとのこと。3月10日がお誕生日だったのであとひと月で97歳におなりだったのだが……。

英国をこよなく愛し、毎夏イギリスへの旅を続けていらした先生のお気に入りの一つは汽車の旅。今頃は外山弥生先生や中村義勝先生と仲良し3人組で、窓外に果てしなく広がる空を眺めてワーズワースの詩「水仙」の句でも口ずさんでいらっしゃるだろうか。

共立で出会えた先生方や友人たち、先輩、後輩と共有した素晴らしい時間は私の大切な宝物。‘袖すり合うも多生の縁’ 共立とのご縁に心から感謝。ありがとうございます。

稲見和子（S49卒）

広場

◇地唄舞公演

11月7日、閑崎ひで佳(辻村一美)さん(S48卒)の第7回地唄舞の公演が日本橋公会堂で開催された。第一部はラヴェル「亡き王女のためのパヴァーヌ」とドビュッシー「月の光」にひで佳さんが振りをつけたもの。裾を引き扇をかざした地唄舞の姿で静かな美しい空間を創り出していた。第二部は近藤瑞男先生の舞と踊りについてのお話。舞は神への鎮魂のための神事から起こり、踊りは人々の喜びの表現から発展し、能や歌舞伎として伝えられているという講義は分かりやすかった。

第三部は地唄舞の「融」と「雪」。「雪」は数々の舞台を私は見ているが、ひで佳さんの舞は若々しく、あでやかな美しさを感じさせた。伝統の担い手としてのさらなる精進をお願いいたしたい。

仙葉弘子（S 33卒）

◇「律女立つ」公演

劇団句組(わぐみ)の第5回公演「律女立つ」が、2018年10月24日(水)～28日(日)の4日間にわたって、中野の劇場MOMOで上演されました。脚本を書かれた大森句子氏は、共立Spirit! file 4でご紹介した、高田句子(つやこ)さんです。

収容人数は100人に満たない小さな劇場でしたが、その分、舞台と客席とが近く、役者さん達の熱気が場内に伝わってくるのが感じられました。

主人公の正岡律は、正岡子規の妹です。母とともに子規の文学活動を支え、また、結核性カリエスに苦しむ子規を献身的に介護しました。そして、子規の死後、共立女子職業学校に入学し、卒業後は教員として勤めました。兄のために生きてきた律が、自身の道を選び、ひたむきに歩んで行こうとする姿が感動的でした。

掲示板

INFORMATION

◇2019年度の総会・文芸サロン講座は5月25日（土）に開催されます。
総会：11時～12時
文芸サロン講座:13時半～15時半
講師:入江和生氏(共立女子大学名誉教授、前学長)
＊詳細は追ってお知らせします。

◇2019年度共立祭
10月19日(土)・20日(日)

◇絵画展のお知らせ
「伊藤和子絵画展」
2019年12月11日(水)～17日(火)
小田急新宿店本館アートサロン
＊第29号で2019年12月4日～10日とお伝えしましたが、変更になりました。

編集後記

EDITOR'S NOTE

2018年度の総会・サロン講座は例年より5か月遅い開催でしたが、サロン講座の講演を拝聴し、心豊かな気持ちになるのは変わりません。情報化社会の中で今何が大切かを考えることは重要だと思います。年度末の別れの時を経て、春4月、皆様によい出会いが訪れますように。(K)